

創刊の辞

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は誰だったのか。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は何をしたのか。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は何をもたらしたのか。

我々はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）研究を志すにあたって、これらの素朴な問いに立ち返って
みることから始めたいと考えた。

我々の勤務校である富山大学附属図書館は、前身である富山高等学校開学時に馬場はる刀自より寄贈
されたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の旧蔵書、すなわちヘルン文庫を擁する。松江や熊本と違っ
て、ハーンが生前一度も訪れたことがなく、特に直接的なゆかりのないこの富山の地になぜヘルン文庫
がもたらされたのか、それはひとえにこの地の人々の知への渴仰の賜物なのであって、我々はこの、旧
制富山高等学校建学の精神に立ち返って、この地をヘルン研究の一大拠点となすべく活動を始めたので
ある。

ゆかりは全くないわけではない。この地ではヘルン文庫を中心にこれまでも、ハーンが生き、書いた
軌跡を辿りながら、先人たちがさまざまな活動を行ってきた。我々の活動はもちろん、その恩恵を受け
つつ、それを継承するものであることは言を俟たない。「ヘルン」は、ハーンが愛した自らの名の日本で
の発音表記、ひいては蔵書印の表記に由来する。2015年5月、志を同じくする富山大学の5人の研究者
が集まり、富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会が結成されたが、この研究会の呼称にも、また毎年
の研究の成果を結集させるため創刊したこの論集の呼称にも「ヘルン」の名を冠したのは、そのためである。

これまでは、個別の研究者がそれぞれに研究を行うことはあっても、専門の異なる様々な学内の研究
者がチームを組んで研究活動を行うことはなかった。文系学部の改廃が叫ばれる昨今、我々は、文科系
の学問・研究とは何であるか、それはどのような意味を持つのかについて、客観的かつ明示的なメッセ
ージを発することを学内外から求められてもいる。そのような状況の中で、ヘルン文庫を擁しながら、
我々はただそれを安全に保管することだけで良いのか、ハーンのもたらしたものを後世に伝えるとは、
単にそれだけのことで事足りるのか、という問いに駆り立てられて、それぞれに幾度となくヘルン文庫
に足を運び、ついには研究会を結成するに至った。こうして集まった日本近代文学専攻の西田谷洋（人
間発達科学部）と小谷瑛輔（人文学部）、日系アメリカ人文学専攻の水野真理子（医学部）とアイルラン
ド文学専攻の結城史郎（人文学部）、そしてフランス近代文学専攻の中島淑恵（人文学部）は、素人なが
ら手探りでそれぞれに異なるアプローチでヘルン研究に手を染めることになった。

しかし、いざ始めてみると、研究上様々な問題があることにも気づかされた。たとえば定本の問題で
ある。ハーンが著作は当然のことながらすべて英語で書かれている。しかしながら一般に普及している
翻訳についても、今日その影響は無視できないほどに肥大している。また、英語版にしても、いわゆる
16巻本の著作集（*The Writings of Lafcadio Hearn, Boston and New York, Houghton Mifflin Company, 1922*）
を定本とするのか、インターネットの普及した今日だからこそ可能な方法として、初版本に一つ
ずつ当たり直すのかについても再考を迫られた。とりわけハーンが東京帝国大学その他における講義録

については、この問題が大きいものといえる。

また、旧制富山高等学校時代に作成された『ヘルン文庫目録』（1927年）および比較的最近作成された『ヘルン（小泉八雲）文庫目録』（1990年）においても、目録の宿命として、さまざまな遺漏や誤記・不徹底等があり、逐次補遺を行うべきものであることが課題として立ち現れてきている。とりわけアンカット部分の調査と書き込み調査については、学術的な精査によらなければその意義や全貌を把握することはできないものであり、今後も継続的に行ってゆくべき活動のひとつであるといえる。

しかしながら、世にハーン研究多しといえども、これまでに行われてこなかったアプローチはまた数多くあり、それぞれの分野で研究を行ない、それぞれに方法論を確立して来た我々に残された新たな研究の可能性は無限に開かれているものともいえる。それはある意味、ハーンの死後次第に形成されてきた、明治の文豪にして偉大なる教師、という従来のハーン像をある意味覆すものとなる可能性もあるかも知れない。しかし、データに基づいてエビデンスを出すという科学的研究態度を、今日に生きる我々が捨てるわけには行かない。むしろ我々の研究によって、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）という比類なき人物が、どのように生き、我々に何をもたらしたのかについて多様な層のもとにそのありようが照射できれば幸いであると考えている。

我々はまた、研究者であると同時に教育者でもある。我々に課された問題は膨大であり、我々の世代では解決できない問題も数多くある。また、研究とは後世の知の刷新によって絶えず更新されるべきものでもある。したがって我々の活動は、我々の世代で完結するものではなく、次の世代へと継承すべきものなのであって、このように研究論集を定期的に編むことにしたのも、そのためであることを先に申し上げておく。ご批判・ご叱正大歓迎である。この論集が、ハーンをめぐる議論が活発になることを目指して一石を投じたものであるとご理解いただければ幸いである。

したがって、創刊号である本号は、表記の不徹底が散見されることとなった。専門分野が異なれば、論文の書き方自体が異なり、スタイルもプレゼンテーションも異なる、という問題を敢えてそのままに再現することが、分野を超えて対話することの可能性を開き、互いに切磋琢磨することの重要性を明示することにつながるのではないかと考えてもいる。またその結果として何回かの試行錯誤を繰り返しながら、富山大学ヘルン研究会独自のスタイルというものが確立されて行ってもよいのではないかとも思う。しかしながらこのような表記の不徹底とは裏腹に、内容的にはすべて学術論文または報告としてある水準を保っていることは、お読みいただければお分かりいただけるものと考えている。

本論集に収められた論考は概ね、2016年2月13日・14日に行われた国際シンポジウムで発表されたものである。うち、「報告」と冠されているものは、同内容の論文あるいは著作が近い将来発表される予定のものであり、ここではその概要のみを記しているものである。この論集をお読みいただき、ハーン研究に少し新しい風が吹き始めたことを感じ取っていただければ望外の幸いである。

今年度は、我々のこのような活動に対して、富山大学における文系研究興隆の兆しを認めていただき、大学より学長裁量経費の交付を受けることが出来た。この論集が刊行できるのもその恩恵によるものである。関係各位に心より感謝申し上げます。

2016年3月

富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会